

# 古事記の背景を探る

2022. 10. 23

## 1. 古事記概要

古代の日本の歴史を記したものに、古事記と日本書紀がある。日本書紀は漢文で書かれた正史古代日本歴史であり、諸外国に負けないステータスを得るために天皇家の歴史を編纂したものである。これに対して、古事記は天皇家の祖先である神々の世界、ならびに古代天皇のことを、漢文でつづられている。

では、こうした神話は現代にいてどう捉えられているのだろうか。確かに、洋の東西問わず、国の成り立ちは神話としてロマン話となっており、ファンタジーそのものを楽しむこともある一方では、歴史ファンのように神話の背景として何かしらの事象があり、それが神話に反映された結果とも受け止めることも多い。

ここでは、後者の立場で神話の背景を探ることにして歴史書「古事記」にある神話をより楽しむことにする。具体的には、古事記の編纂目的、信ぴょう性、具体的内容の三点が論点である。

## 2. 古事記に関する論点

### (1) 古事記の編纂意図。

意図は、天皇家による国の支配について神代から神としての正統性の根拠を作ることにあつたとみてよい。このため、神々の世界から地上の国（この世）が造られ、天皇家は神々の子孫であることを歴史として明示しておく必要があり、そうした歴史について朝廷方の語り部や各地の神話・伝承に加えて諸家の持つ帝紀や旧辞をも含め、国家としては文書記録を作ったのであろう。

発案は、天武天皇(670~680年代)であり、古事記は持統・文武・元明の天皇の時代を経て足掛け三十年程かけ編纂し、712年に完成した。古事記は、語り部の談を中心にした口語調の記載であつたためか、貴族の読み物や若者の教育用の本であつたといい、江戸時代、本居宣長によって40年かけ翻訳され一般に流布したという。

### (2) 古事記の構成について。

神々の時代から推古天皇までの時代を三巻にまとめ、一巻が神々の時代「神代」、二巻三巻が天皇の時代「人代」を扱っている。

### (3) 記載内容の信ぴょう性について(はじめにの節でも若干説明)。

古事記には超越的という捉え方があるものの、何かしらの現実的事象があるはず。また、古事記の記述には何らかの歴史的事実があつたとみるべきであろう

し、何らかの政治的意図も史実として隠されているとの見方がある。

(4) 古事記では、夢物語と捉えてもそこには自然観や人物観がごく自然に描かれていること、人間っぽい神々がロマン的であることからしても、日本人の思考の原点を形成しており、日本人必読の書と位置付けても良いといえる。

## 3. 神代のテーマ

古事記において、神代のテーマは10個であり、以下に示す。また、10個のうち面白い項目を太字にしておいた。

「**天地開闢**(カヒヤカ)、**国生み・神生み**、**黄泉の国**、**三貴子**、**天岩戸**、**ヤマタノオロチ退治**、**出雲神話**、**国譲り**、**天孫降臨**、**日向三代**」

### (1) 天地開闢；

天地に代表される世界が初めて生まれたときのこと。古事記には天地創造の記載はないが、日本書紀では、世界の最初に、高天原に相次いで三柱の神(造化の三神)が誕生と記されている；天<sup>ニ</sup>之御中主神(ミナカミ)、高御産巢日神(タカムスビ)、神産巢日神(カミムスビ)。

その後の誕生は；宇摩志阿斯訶備比古遲神、天之常立神。さらに後は；国之常立神、豊雲野神、伊耶那岐神(イナギ)と伊耶那美神(イナミ)。

△最初の神は性のない独神であつたのは、超越的存在であらねばならなかつたのであろうか。

### (2) 国生み・神生み

天の高天原の神々が伊耶那岐神(イナギ)と伊耶那美神(イナミ)に命じて、国を生み、次いで多くの神を生む。

・国とは；淡路島、四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡、そして本州の順。

・多くの神々とは；石の神、土の神、海の神、風の神、山の神、穀物の神。ありとあらゆる神々。

#### △国生み・神生みの解釈

・天空から海を剣でかき回した雫が日本列島という。これは海の生活をしてきたことに他ならないということか。

・淡路島が最初に誕生とは。神武東征のときに四国から淡路島にわたつたとの話からか。隠岐は出雲豪族に花をもたせたのか。

・ありとあらゆる神々とは、八百万の神々のこと。そんなに沢山いたのであろうか。

### (3) 黄泉の国

伊弉諾神は亡き妻伊弉諾に会いに黄泉国に行く。この時に人間には死を伊弉諾が与え、生を伊弉諾が与えるとした。人間に寿命が付与されたことになる。

△天人間の話が初めて出てくる。神々の世界だから人間の存在は影が薄いといえる。

### (4) 三貴子、(三貴神)

黄泉の国から伊弉諾神が逃げ帰ってきたときに様々な神の出現とともに伊弉諾の左目からは天照大御神(アマテラスオホミカミ、天の神)、同じく右目から月読命(ツヨミノミコ、夜の神)、同じく花から須佐之男命(スサノヲノミコ、海の神)が生まれる(出現する)。

△神がかならずしも父親と母親から生まれるのではなく、体の一部から生まれるといった超常現象もある。

### (5) 天岩戸；

天照大神が弟の悪行に腹を立てて岩穴に隠れた。慌てた他の神々が何とかアマテラスをなだめた。

△天を司る神が隠れたれた事象は、どうも日食のことをいうようだ。芸能の始まりはこの時にありとの説あり。

### (6) ヤマタノオロチ；

八つの頭と八つの尻尾をもつ大蛇をスサノヲノミコが退治した。尻尾から鉄剣(草薙剣)が現れ、これをアマテラスに奉納した。

△八つの頭と八つの尻尾はどうも河川らしく、オロチが暴れるとは大洪水のことを指すのでは。また尾っぽから鉄剣が現れたとは出雲が製鉄の場であったことをいうのでは。

### (7) 出雲神話

出雲を中心とする神話。高天原を追われたスサノオは出雲に降り、八岐大蛇を退治し、大蛇から命を救った櫛名田比売(クシナギヒメ)と結婚し、出雲を治めた。その裔の大国主神はさらに国土を経営したが、天孫降臨のまえ、その国土を奉れとの天照大神の命に応じて奉納し、政権を離れて隠退。

### (8) 大国主命の国ゆずり；

因幡の白兔の話にもあるように、困り果てていたウサギを助けて、地元の姫神をめとった大国主命が国を統治した。大国主命(オホウニノミコ)はスサノオの裔。

アマテラスの命令で大国主が治めていた出雲国をアマテラスに返上した。

△国譲り；これは出雲を舞台に土着の出雲系統と皇孫系との争いで後者が勝利したことを意味するようだ。また、因幡の白兔については、兄神達のいじめに

耐えている弟神の大国主命が国を収めるにふさわしい優しい人であることを意味している。地元の姫神との結婚で国づくりに着手といったところか。

### (9) 天孫降臨；

アマテラスオホミカミの孫の番能邇々芸命(ホニギハミコ)が随伴神や先導神を伴い、筑紫日向の高千穂の久士布流岳に降臨する。

△・降臨の地は、阿蘇南外輪山を源流に日向に向かう五ヶ瀬川の高千穂峡か、もしくは霧島連山のひとつである高千穂山(久士布流岳)かの二説あり。前者は、北九州の邪馬台国と関連させて阿蘇外輪山から下流に降りてきたとして有力な説。

・地上の権力者の先祖は高天原の神様であるというくんだり、権力者の権力の正統性を神に求めたものと解釈されている。

・孫の降臨は、持統天皇による孫(文武天皇)への権力の移譲を正当化したものといわれている。

・現実世界の為政者は神の権威に正当性を求めたわかりやすい事象が天孫降臨といえる。

### (10) 日向三代

天孫降臨したホニギハミコが日向の女性と結婚し三人の皇子が誕生。第一子が火照命(ホトリ、海幸彦)、第二子が火須勢理命(ホセリ)、第三子が火遠理命(ホトリ、山幸彦)である。なお、天孫族が天皇家の祖先のなる(孫が神武天皇)。

△朝廷の祖は日向にあった。海幸彦は九州南部に住む隼人族を指し、山幸彦は天孫族のことで、日向三代之ころ、天孫族と隼人族の争いを海彦山彦が登場する話としているようだ。なお、勝者は天孫族である。

## 4. 深堀テーマ

### 4. 1 神々の世界

#### (1) 神の性

・男女の神とは別に独神がいた。性を持たなかったとみられている。子供の誕生を出現と記しているところを見ると、必ずしも男女のカップルで子供を作るといふことのような。なぜ性を超えての話なのか。これも、神の世界は超自然の世界ということのようである。

・天照大神について、太陽の象徴となっている。(男性説も一部にあるが)なぜ女性かについては、持統天皇の権威付けには女性神が必要だったようである。

#### (2) 平和な世界

・神話では国ゆずりや海彦山彦の話には出雲族と天孫族、隼人族と天孫族の争いがあったことが伺いしれる。争い(覇権争い)を神々の世界に元込むことをせず、架空の話に持っていきけるのも神話ならではのなせる業である。神が意味の世界は基本は平和であることが必

要ともいえる。

- ・神々の世界でも、乱暴狼藉はいうに及ばず恨みや嫉妬もあって、キナクサイ様相は確かにある。これとて、何かうちわモメがあったことをほのめかすかのようであるが、神々の世界は平和であるので、平和を極力演出しているかのようである。

### (3) 沢山の神々

- ・多神教として、物には必ず生があり、神が宿るといったことなのであろう。
- ・古事記に出てくる神々の数は300神以上。古事記の生活様式が反映されているとみてよい。
- ・八百万の神は、現代にも受け継がれているとみている。気候が温暖な日本では、生命の息吹を感じる人が多いということなのであろう。
- ・寛容の精神も、ここから来ているといえよう。天岩戸の話も寛容の事象と捉えることができよう。

## 4. 2 神々の住まう場所

### (1) 国づくり

- ・国づくりにおいて、天孫族が東に進出するとき、四国から淡路にわたったとか。そうしたことが島の誕生を特徴づけたのであろう。国全体を展望するような地図がなければ、ミクロな島の構成から話が始まるのも当然といえる。
- ・天は地上と違って災害がないってことか。

### (2) 天空と地上の世界

- ・高天原はそれこそどこにあったのであろうか。天孫降臨の降臨はどんな地形環境であらうか。
- ・卑弥呼の邪馬台国と関連させて、邪馬台国を九州北部として、個々を高天原とすると降臨は高千穂はかなり理屈に合う。邪馬台国の所在も明らかではないが、時間と空間の拡張をして、物事を論じた方がいい。その意味で、邪馬台国を登場させるのは面白い。古事記でまるっきり、邪馬台国について触れていないのも気にかかる。

### (3) 生活

- ・アマテラスも氏神にお供え物をしていたという。氏神崇拜が神々の世界にもあったということ。逆にいえば地上での氏神崇拜を神々の世界にも導入と言ってもいい。
- ・白兔の話でもウサギはお礼を言ったとある。このお礼というには奥があり、人や鉄器等の貢物のことをいうのではなからうか。そういう意味では奴隷制がとうじあったろうが、表に出てこないというのも神話のなせる業であらう。

## 4. 3 日本書記との関係性

- ・日本書記では神代の記述は少ない。古事記とは別の

展開。これを古事記の修正とみるのか、国家の正史として必要だったのかは意見が分かれる。

- ・古事記において、なぜ神話として歴史を捉えたのか。あまたの豪族を取りまとめるには現実離れした神話が最適だったのでは(神々の世界の話ならば架空の話として受け止め容易)。もちろん、天皇家の神格化のためには神話は不可欠との見方あり。

- ・古事記は古代の歴史と捉えることはないが、考古学が発展していった場合、古事記の検証にもなるという意見もあるが、神話は歴史ではないので、神話は神話のままということだろう。むしろ古事記は、今日、古代文学として捉えられている。

- ・古事記や日本書記の平安山に関しては、渡来人や藤原不比等の存在が形を変えて影響したのではとの見方もある。

## 4. 4 古代に日本のルーツ

- ・古事記は奥が深いとされているが、なぜ深いのか。日本人のルーツに結構触れており、すぐに絵空事とはせずに、日本人の生活様式のどこまでが反映されているのであろうか。

## 4. 5 古代の諸外国

- ・外国の神話と比較するとどうか。これについてはあまり語られてはいない。中国やギリシヤ神話など。

## 5. おわりに

本稿をまとめる気になったのは、2021.4.15に、「本当はとても面白い!!古事記の話」と題した歴史研究家山本氏を交えての勉強会があったことがきっかけである。そこでは、古事記を本邦最古の歴史書というよりはフィクションロマン書と捉えて、ロマンを楽しんだ。その背景には、古今東西、歴史の始まりはロマンフィクションにあるとされている。ならばせつかくだから、もっと種々のことを調べて体系的にまとめてみた。

本稿をまとめるにあたり、ロマンに浸りながら、今日的に感心したことあり。列挙する。

- ・現世の政治的行為に理屈をつける場合には、神話として正統性を形成としておく方法があるということである。

- ・歴史書の編纂姿勢が編纂目的にかなうように巧みに作られていることは興味深い。これを歴史としての位置づけではなく、古代文学として位置付けるほうが妥当である。もちろん、その背後にらしき歴史事象の存在はあったろうと考えれる。これとて、編纂者の時代状況をベースに検討していくべきである。

- ・寛容性や自然を愛でる姿勢は日本人の感性や民族性のルーツになっていることが多い。これは古代人の感性が神様に付与したとみることも出来よう。

△あとがき ; いかがでしたでしょうか。最後までお読みいただきましてありがとうございます。

=====

## ◆◆付録

### A1. 古事記中下巻 中巻き・下弦巻きの目次は ;

#### A. 中巻

- ・神武東征、
- ・神武天皇(初代)から綏靖天皇(2)へ
- ・崇神天皇(10)、・垂仁天皇(11)、・本牟智和氣御子
- ・景行天皇(12)と倭建命、
- ・弟橘比売命、倭建命の崩御
- ・仲哀天皇(14)・神功皇后・応神天皇(15)
- ・天之日矛・秋山の神と春山の神・応神天皇の子孫

#### B. 下巻

- ・仁徳天皇(16)と石之日売太后
- ・弁恭天皇(19)軽太子と軽太郎女
- ・安康天皇(20) 弑逆
- ・大長谷王の暴虐
- ・葛城山の犬猪～葛城の一言主神
- ・顕宗(23)・仁賢(24)の物語
- ・武烈天皇(25)

### A2. 古事記編纂に向けて 節2(1)と多少重複

国の歴史については、天武天皇以前には、蘇我馬子と聖徳太子が編纂した天皇家の歴史をはじめ多くの書籍が蘇我入鹿事件にて燃失した。その後、天武天皇は国家として歴史書の必要性を痛感し、国や天皇家の歩みを記した歴史書を編纂することにした。当時、諸家の持つ帝紀や旧辞には、内容の一貫性や虚偽に問題があったので、国全体の歴史書として整合性のある統一的な歴史書を古事記の編纂として、天武天皇が着手したといわれている。

編纂に際して、どのように編集したかはわからないが、今日的感覚でいえば、あらかじめ基本骨子を設定し、諸家の歴史書を参考にし、かつヒアリングも行って、整合性を図っては、基本骨子の変更と整合性を繰り返し連続作業をしたのであろう。もちろん、神々の話は当然現世では自明として認めながら、種々の話に整合性をつけて肉付けした、と思える。

実際のところは分からないが、稗田阿礼(ヒエダ アリ)が習誦していた歴史を太安万侶が筆録したので、記載は口語調的であり、ストーリー性もあったとみることができる。

### A3. 古事記の今日的効用

古事記研究者によれば、古事記は神話の世界であっても、物語的には統一性と整合性が貫かれていて、文学作品としても価値ありと評価が下されている。確か

に、当時は貴族の学習用教材であったともいわれているし、今日的にも日本や日本人のルーツとして持ち上げられるのも、多分にそうした所によっている。

古事記が貴族時代からは急に忘れさられたが、近世(江戸期)になって注目を浴びたのは、ひとえに本居宣長のおかげである。宣長は三十数年かけて古事記の注釈本(解説本)なる「古事記伝」を執筆した。これにより、古事記の価値が高めた。

現代に入ってから、日本および日本人のルーツの探求として、古事記は再評価され、ひとところちょっとした古事記ブームを起こした。古事記研究者によれば、孔子の「温故知新」もいけれども、古事記の「稽古」「照今」(意味は温故知新)として現代にも脈々と古典性を発揮しているとの指摘があるとのことである。

### A4. 古事記と日本書記

日本書記は天武天皇が 681 年に編纂を指示し、720 年に完成(古事記の 8 年後)。古事記は天皇家の正統性を国内に示すことを目的に編纂。日本書記は外国(東南アジア)に対しての日本国の正史を構成する目的で編纂。

神話の扱いは日本書記では少なく、強い日本をイメージしてか、国家構成を念頭に、古事記とは次元を異にした(書き換えたともとれる)表記となっている。例えば、ヤマトカミノミコはクマの征伐をした英雄としての扱いがある。

### A5. 参考文献

- (1) 山本晃司 ; 本当はとて面白い!!古事記の話、朝活 Zoom 講演会、21. 4. 15
- (2) 国学院大学 : 古典文化学、HP